

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730852

研究課題名(和文) 大学における視覚障害学生支援のための人的サポート体制構築に関する実践的研究

研究課題名(英文) Practical Research on Human Support System for Blind and Partially Sighted Students in University

研究代表者

青柳 まゆみ (AOYAGI, Mayumi)

筑波大学・人間系・助教

研究者番号：40550562

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、視覚障害学生に対する支援の方法として期待されている印刷物のテキストデータ化について、これを行なう人材養成プログラムの開発を目的として実施した。
筑波大学障害学生支援室の開設により実施されてきた視覚障害学生支援者養成講座(当該大学の学生対象)のカリキュラム及び教材の内容、受講者への事後アンケート結果等を整理・分析してプログラムの再構成を行ない、全国の大学で利用可能なプログラムを作成・実施して、その汎用性について検討した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was development of training program on making electric text for blind and partially sighted students in university.

The curriculum of training program which has been offered by Office for Students with Disabilities, University of Tsukuba was examined carefully, and new program widely applicable for other university's training sessions was suggested.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：視覚障害 障害学生支援 大学 支援者養成 テキストデータ化

1. 研究開始当初の背景

近年、障害のある学生が一般の大学で学ぶ機会は増加傾向にある。その要因としては、高等教育機関への進学率の一般的な増加とそれに伴う障害者の学習意欲の高まり、大学側の障害者受け入れ体制の改善、入学選抜方式の多様化（障害者特別選抜を含む）等が考えられる。独立行政法人日本学生支援機構の調査によれば、全国の大学等に在籍する障害学生数は、平成 20 年 5 月 1 日現在（本研究応募当時）6235 人であった。潜在的な障害学生もいることを考慮すれば、さらにその数は多いと予測される。

こうした状況の中で、高等教育機関における障害学生支援の充実を目指した研究が、多方面の視点から急速に進められている。1977 年、米国において“ Association on Higher Education and Disability: AHEAD ” が組織された。同委員会は、高等教育期間における障害者の完全参加をスローガンとした国際的な組織であり、障害学生に対するサービスと支援の質の向上を目指した各種の活動や提言を行ってきた。同委員会の功績は、日本における障害学生支援に関する研究の発展に対し、貴重な資料を提供している。しかし、教育システムや財政基盤、大学のカリキュラムなど、多くの側面において欧米と日本ではその内容が異なるため、国内での研究を補足して日本独自がかかえる問題を明確にし、より実情に即した支援システムの構築を目指していく必要があると言える。

日本における障害学生支援関連のこれまでの研究は、全国の大学または障害学生当事者に対する実態調査、各大学における取り組みに関する事例報告、一般学生の障害者観に関する社会心理学的研究など多岐に渡る。しかし、基礎的な情報や知見の収集に加えて、具体的な支援方法の提案が急務の課題となっている。

視覚障害学生の支援については、入試における特別措置をはじめとして、点字教材の提供や移動環境の整備など、各大学における修学支援の取り組みが充実してきている。しかし、視覚障害学生を対象とした調査研究によれば、大学における支援体制や支援内容が必ずしも十分とは言えず、特に教材や資料へのアクセスについては質・量ともに改善が求められている。

大学における障害学生支援の大きな要として、一般学生等による人的サポートがある。この人的サポート体制の量的・質的安定を図るための方策が模索されている。

視覚障害学生に対する支援についても人的サポートは不可欠であり、その内容は、教科書等の点訳、対面朗読、印刷物のテキストデータ化¹⁾、実験・実技科目等のサポートなど多岐に渡る。

中でも印刷物のテキストデータ化は、一般向けに市販されている機材とソフトウェア

で実施が可能なこと、特殊な技術を必要としないことなどの理由により、教職員や一般学生が容易に関われる支援方法と言える。しかし、視覚障害学生のニーズに応じた効率的なテキストデータ化を行なうためには一定の知識と技術を提供するための講習が必要であり、そのカリキュラムや教材等の詳細な検討が課題となっている。

1) 電子データが存在しない印刷物（書籍、新聞記事の切り抜き等）をスキャナでパソコンに取り込み、OCR ソフトを用いてテキストデータに変換し、そのデータを支援者が必要に応じて手動で構成するという一連の作業。

2. 研究の目的

本研究では、視覚障害学生に対する人的サポート、特にテキストデータ化の支援について、その知識と技術を提供するための支援者養成プログラムを作成し、全国の大学の研修等における利用可能性について検討することを目的とする。

具体的には、筑波大学障害学生支援室の開設により実施されてきた障害学生支援者養成講座、とりわけ本研究代表者が中心となって関わってきた視覚障害学生支援者養成講座の内容を整理・分析し、全国の大学で利用可能な汎用性のあるプログラムを提案する。

3. 研究の方法

本研究では、筑波大学で平成 17 年度より開始された「視覚障害学生支援者（ピア・チューター）養成講座」のカリキュラム及び教材の内容を検討し、他大学でも利用可能な養成プログラムを作成する。そして、他大学の支援者（学生、教職員等）を対象とした研修会に同プログラムを適用し、その有効性と汎用性について検討する。具体的には、以下の研究を行なう。

(1) 実態調査

視覚障害学生の受け入れ及び支援を積極的に行なっている国内外の大学を訪問し、当該大学の支援体制、特に支援者養成プログラムの内容、支援者のコーディネート方法等について調査する。

(2) 支援者養成プログラムの作成

筑波大学障害学生支援室が毎年 3～4 回程度実施している視覚障害学生支援者養成講座（同大学の学生対象）のカリキュラム及び教材の内容を整理・分析し、他大学でも利用可能な養成プログラムを作成する。

受講学生に対して事後アンケート調査を実施し、プログラム改善の参考資料とする。

(3) プログラムの汎用性の検討

視覚障害学生に対する人的サポートを提供している他大学において上記(2)のプログラムを実施し、受講者へのアンケート調査・

面接調査等を基に同プログラムの有効性及び汎用性を検討する。

4. 研究成果

(1) 視覚障害学生支援者養成プログラムの作成

筑波大学障害学生支援室の開設により実施されてきた障害学生支援者養成講座、とりわけ本研究代表者が中心となって関わってきた視覚障害学生支援者養成講座の内容を整理・分析し、以下のような総合的なプログラムを作成した。

視覚障害の理解

テキストデータ化をはじめとした視覚障害学生の支援を行なうためには、視覚障害学生が日常的に直面している困難さに気づき、具体的な支援ニーズを適切に理解することが不可欠である。そこで、全盲体験、弱視体験を中心としたプログラムを作成し、支援者養成講座の導入部分に位置付けた。

全盲及び弱視体験の内容としては、大学生活と直接関わりのある場面を設定し、具体的な困難事項と支援ニーズをイメージしやすいように配慮した。

受講者の事後アンケートでは、『不安だった』が、『今後の支援の参考になった』と評価した者が非常に多かった。また、各体験活動後に実施したグループディスカッションの記録からも、体験活動の有効性がうかがわれた。

テキストデータ化の基礎講習

視覚障害者との打ち合わせ 画像データの取り込み OCR ソフトによる文字認識 校正という一連の作業を効率的に行なうために必要な基本的な知識と技術を伝達するプログラムを作成した。

テキストデータ化のスキルアップ講習

視覚障害学生、支援学生双方の意見を聴取し、基礎講習では不十分な内容を選定して、支援活動従事者を対象としたスキルアップ講習用のプログラムを作成した。

その他の支援方法に関する講習

複雑なレイアウトの文書や図表、プレゼンテーション資料等の作成補助を行なう際に必要となる技術、及びコミュニケーション方法を習得するためのプログラムを作成した。大学院に在籍する視覚障害学生の支援に役立つプログラムとなった一方、学部学生を中心とした受講者には習得が難しい課題も含まれており、より専門性の高い支援者養成の課題が明らかとなった。

なお、上記 ~ は、受講者の属性や時間の制約等を考慮して、適宜必要な内容を選択的に実施することが重要である。

(2) プログラムの有効性及び汎用性の検討
上記(1)のプログラムのうち、 の有効性及び汎用性を検討した。

2 大学の支援者養成講座（私立大学の学生ボランティア養成講座、私立大学の教職員研修会）において、上記 のプログラムを実施した。

プログラムを受講した学生及び教職員に対するアンケート調査と聞き取り調査から、本プログラムが実践に役立つ内容を多数含んでいたことが確認された。また、教職員研修会の参加者が受講後に積極的にテキストデータ化を行ない、視覚障害学生に教材等を提供していることが確認された。

(3) 今後の課題

今後は、主に以下の課題を中心に研究を進展させていく必要がある。

視覚障害学生支援者養成プログラム（カリキュラム、教材等）の再検討、及びプログラムの再構築

本研究で作成した支援者養成プログラムの普及（視覚障害学生を受け入れる多くの大学への情報提供、伝達講習の実施等）

作成されたテキストデータの大学間共有及び共同利用の可能性の検討

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

青柳まゆみ、視覚障害学生支援の現状と課題 筑波大学における支援事例を中心に、発達障害研究、査読無、第33巻4号、2011、367-373

〔学会発表〕(計1件)

青柳まゆみ、筑波大学障害学生支援の実践報告 - 到達点と今後の課題 -、障害科学学会、2013.3.2、筑波大学

〔図書〕(計3件)

聖徳大学特別支援教育研究室(編)、聖徳大学出版会、改訂版 一人ひとりのニーズに
応える保育と教育 -みんなで進める特別支援-、2014、218(19-37)

青柳まゆみ・鳥山由子(編著) ギアース教育新社、視覚障害教育入門、2012、136
(28-35,100-108,122-127)

竹田一則・鳥山由子(編著) ギアース教育新社、障害学生支援入門 誰もが輝くキャンパスを、2011、170
(34-41,82-93,94-95,142-143)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青柳 まゆみ (AOYAGI, Mayumi)

筑波大学・人間系・助教

研究者番号：40550562

(2)研究分担者
なし